



同志社
歴史散歩
高島
中村 貢

1

いづくにかわれは宿らむ高島の
勝野の原にこの日暮れなば

高市黒人 万葉集卷三

この歌を読むと、当時若狭街道を歩いてや
つとこの寥々とした宿場に着いた旅人の、心
細い思いが身に沁みる。今は高島の勝野の原
というより、萩の浜水泳場のある町といつた
方が、ピンと来るであらう。以前は大溝町と
いったが、二十数年前、付近の二カ村を合併
して現在は高島町と称せられ、勝野という名
は一行行政区画として残されている。古来、湖
西と言われているこの地方は、近江の北海道
と悪口を言われるほど冬寒く、雪が多いばか
りでなく、地味はやせ、交通は不便、従って
文化の浸透も対岸の湖東地方に較べるならは
るかに遅かった。それでもこの町は、高島郡
一円の交通の要路、物質の集散地として、多
少でも形を整えた町であり、殊に湖西唯一の
城下町で、明治維新までは整然とした武家屋
敷の並ぶ一郭をもった格式の高い町を誇って
いたものである。以前、小川村と呼ばれた中
江藤樹の生地は、町の北方約三キロのところ

にあり、陽明学の開祖とも言うべき碩学なが
ら、貧しい生活を支えるために酒の小売りを
していた藤樹は、この町までわずかばかりの
酒を仕入れに来られたものであるという。

2

大溝藩主分部氏は、わずか二万石の大名で
あったが学問の盛んな藩として知られ、伊藤
仁斎を祖とする古義学派の高弟も多く輩出し
た。特に新島先生との関係を辿れば、大溝藩
最後の藩主、分部光謙氏の父君・光貞氏は、
新島家が仕えた安中藩主板倉勝明氏の弟で、
氏は養子として分部家を継いだ。兄勝明氏
同様学問への関心が強く、新島先生とは極め
て関係の深い川田剛を招き、藩の儒者として
学を講せしめられた。

光貞氏は比較的若年で逝去せられ、その子
光謙氏は十歳にも満たぬ幼君として藩主とな
り、間もなく廢藩となった後は華族として東
京に住まはれ、学習院高等部を卒業、鹿鳴館
時代には社交界の花形として、貴族院議員
にも立候補し、政界に進出の希望もあった。

この光謙氏が明治四十一年、四十六、七歳
という働きざかりの時代に全てのはなやかな

希望を捨てて、この旧藩地に隠棲されねばならぬこととなった。氏はある過失のため刑に触れ、華族たるの身分を取りあげられたばかりでなく、数年間服役せられねばならないという痛ましい災難のためであった。これは氏にとって極めて不幸な事件であったが、このことがこの土地に福音の種が播かれる動機となったのである。

3

氏が囚われの身であった頃、聖書並びに内村鑑三の著書を読まれる機会があり、それが氏の人生観をすっかり変える動機となった。郷里に帰られたといっても既に屋敷はなく、小さな仮り住いであったが、翌明治四十二年には、氏の主唱によって聖書研究の会が始められ、数名の者がこれに加わった。氏は六尺豊かな堂々たる偉丈夫で、眉目秀麗、お殿様としての貫録を充分に具えられていると共に、話術も巧みでユーモアに富み、学習院仕込みの英語は仲々達者で、婦郷間もなく青年有志のために英語を教えられ、また友人から借りたレ・ミゼラブルを英訳本によって、毎週わかれわれ少年達に内容を面白く話して下さった

ほどであった。町の人々は大人も子供も氏を「御前(ゴゼン)さん」と呼んで親しんだ。

氏には「お房さん」と呼ばれる美しい夫人があった。この方は以前は新橋の名妓であり、氏は西郷従道をライバルとして張合い、遂に勝を得られたというロマンスがあった。氏の逆境にも離れず、特に氏の獄中生活の間、彼女は看護婦として生活を支えられ、氏の永眠に先立つ数年前に逝去せられるまで、終生愛することのないよい内助者として労苦を共にせられた。

「御前さん」によって始められた聖書研究の会は、翌年五月、大津市の聖公会から永田保次郎師が毎週一回三時間近くも船にゆられて出張せられ、間もなく「日本聖公会大講義所」にまで発展し、その後の二年間に分部夫妻をはじめ十名ほどの男女が受洗し、子供の集会も数十名を集めて盛んに行なわれた。

4

これと同じ頃、この地を出て都会に遊学中の数名の青年男女がキリスト教の感化を受けた。彼らは郷里に帰れば聖公会の集会に出席していたが、この人達の中に去る昭和三十八

年に明石教会名譽牧師として長い牧界生活を終えられた福井邦蔵氏がいる。氏の家はこの町一の素封家で酒造業を営み、氏は膳所中学校を卒業、神戸高商(現在の神戸大学の前身)に入学せられたのであったが、神戸組合教会の渡瀬常吉牧師より受洗し、明治四十五年一月郷里の同窓会の席で入信を告白せられたことに端を発し、町全体にキリスト教に対する大きい反対運動が起こり、盛んであった聖公会の集会は急にさびれてしまった。

しかしこの迫害は、かえって福井邦蔵氏の信仰を一層堅くし、高商卒業と同時に同志社大学神学部に入信して、伝道者としての生涯を志す原因となった。この、町を挙げての反対の熱はあまり長続きはしなかったが、聖公会の伝道が大きい障害を受けたことは事実である。その上更に聖公会にとって不運であったことは、従来、都会で入信した青年達や聖公会の形式にあきたらぬ思いをもっていた信者が、聖公会の集会から離れて別の集りをもつという事態が起こったことである。これらの熱心な青年達の中には昭和三十九年まで大津市長であった上原茂次氏もいた。氏は京都遊学時代平安教会牧師西尾幸太郎氏から受

洗した高島最初のキリスト者の一人である。

5

この新しい団体を支援された最初の人は村上太五平牧師であった。氏は昨夏逝去せられた校友村上愛作氏の父君で、亀岡出身の人、当時亀岡組合教会の牧師であった。極めて誠実なお人柄で、説かれる純福音主義の説教は多くの人々を動かし、仏教の信仰の厚い七十才の老婦人も氏の教えに感激して受洗した。

その後、定期的に伝道せられたのは大津組合教会牧師三谷公一氏であり、氏の努力により一教会にまで発展したのは大正六年であった。教会の設立並びにその後の育成には、神学生として福井邦藏氏の並々ならぬ働きがあり、この間、氏の感化を受けて弟君三名、妹君一名、親戚二名も受洗した。

この数年間にこの地方に大きい足跡を残された人々の中に宮川経輝、木村清松、安部清藏、武田猪平、武本喜代三、中井佐一郎の諸氏があり、これらの人々が同志社人としてわが国精神界の大先覚者であることは申すまでもない。

元来この地は藩校修身堂以来の伝統と中江

藤樹の感化によって割合に知識欲の強いところとされていたが、こうした説教者による反響は著しく、宮川経輝氏の講演会は連日五百名以上の聴衆を集めて深い感動を与え、安部清藏氏がキリスト教講演会の外に、小学校講堂で数日間連続で論語を講ぜられた時には多数の旧藩士が羽織、袴に威儀を正して聴聞し、こんな光景は他では見られないと講師を感激させた。

6

なおこの間に、当時近江ミッションと称した現在の近江兄弟社はこの地の伝道に目を付け、ガリラヤ丸伝道の基地にしたいとの希望をもったが、聖公会がこの地を伝道地と認めているので、重複伝道をしないうという近江ミッションの綱領により、結局不成立に終わった。

この問題について尽力せられた人に清水安三氏があり、氏も又この町の近在の産である。氏は同志社が生んだ最も異色ある伝道者の一人であり、北京の聖者として中国人に敬慕せられ、戦後東京都町田市に桜美林学園を創立し、國主としてキリスト教教育に専念しておられると共に、中江藤樹とキリスト教の關係

についての研究の權威であることに關しては多言を要しない。

7

萩の浜は白砂青松、現在ほど俗化しなかった頃にはしばしば同志社中学校の夏期キャンブ地として用いられ、讚美歌を高らかに歌いながら水泳場までの往復を整然と行進した行儀のよさは町の人々を驚かせた。また戦争の終りごろまで町の東端白鬚神社の浜に故國に引上げた外人宣教師の寄贈による小さい同志社ハウスがあり、教職員に利用されていたが現在はない。約五万坪を有する同志社小松学舎の土地は、それより更に一キロばかり東にあり、近く実現する国有鉄道湖西線が開通の暁には、この場所は現在以上の利用価値を発揮することであろう。

高島町におけるその後のキリスト教運動の消長や同志社人の活動については省略する。それにしても旧藩主分都光謙民の失意の中で播かれた福音の種が生え出で、多数の同志社人がその育成に奉仕した事実を記憶に留めたいと思う。

(昭二大英卒・女子大学教授)